

カトリック六甲教会 教会報

2010

3

No.459

「祈り」

コリンズ神父

灰の水曜日が過ぎて、イースターへの準備の期間が始まりました。もちろん、伝統的に犠牲を払うことは大切なことです。しかし単に、「チョコレートを我慢する」「この期間は映画を見ない」といったことは、少し時代遅れのように感じます。「断食をする時には顔を洗い、ニコニコする」といったことは、ショーアップされたことのように感じます。

今年はまだ一歩踏み込んで「何かをしよう！」と呼びかけたいと思います。積極的に四旬節を過ごすにはどうすべきでしょうか？ 私は、答えは祈りの中にあると考えています。祈りの中で出会うイエスは、私をどう導いてくれるか。静かに待ちたいと思います。

私の歳になると、死は現実的に近くなります。しかし、復活のキリストと共にいる意味は、正直なところ、本当にはわかりません。3月半ばに、イエズス会の同級生の神父の命日が巡ってくるのですが、今年は彼の経験した復活の意味を私も体験したいと思っています。死ぬことは過去のことであり、感じているのは現在を生きるキリストです。それは祈りを通してわかることです。

しかし、本当の復活の意味は何でしょう？ 聖書の中のできごとだけではないはずで、現在を生きるキリストと出会う、それを感じたい。歴史的なキリストではなく、苦しんでいるキリストではなく、復活をしたキリストとの出会いを深く味わいたい。祈りましょう。

どう祈っていいかわからない、との声を聞くことがあります。

決められた祈りを唱える。これは一番簡単な方法です。それでも祈りを終えるときに、「今、何をしたのか？」をしっかりと受け取ってください。

それよりも、毎日のできごとの中で、様々なことに会うキッカケがあるのに、その機会を十分に活かしていないことに気づいてください。一日を終えるとき、その日をゆっくりと味わってください。それも祈りです。

そうして、祈りとは静かに時間を取るだけではありません。毎日、いつも、いつでも呼びかけられている神様の声が聞こえていますか？ 呼びかけられているその時に気づいていますか？ この敏感さを養うことこそが祈りです。

そして毎年、結局は同じことを思い浮かべます。手放して自分自身を神様にあげ渡しましょう。その時、初めて神様の呼びかけが聞こえてくるでしょう。

さあ、しっかり祈りましょう。





みんなの広場

「カトリック教会のカテキズムを読む会」を終えて

本が出版されたとき、読まなければと思った。第2バチカン公会議以降、教義がどのように変わったのか知りたい。そして本には信徒の信仰生活について指針が書かれているのではないかと期待した。

教義については第2バチカン公会議の公式文書からの引用が圧倒的に多く、その分、新しくなっていると考えていいだろう。ただし、この本の特徴のひとつだが、文体が統一されていない。特に難しい教義になると理論的な文章と、神秘主義的な文章が渾然としてくる。神秘主義的な文書は感覚的に理解できても理論としてはなかなか理解できない。その部分は「読む会」でも随分端折った気がする。多くの著名な神学者が集まって、文章を書き、議論する中で出来上がってきた本だと理解するほかない。

教義は新しくなったとはいえ、このごろ教会で話しを聞くことがめっきり少なくなった「煉獄」「免償」についてはちゃんと言及されているし、「天使」「悪魔」の存在についても同様である。もっともこの本の日本版である「カトリック教会の教え」に記されている「免償」は少し書きすぎかなと思うが・・・。

信仰生活についての指針として変わった点は社会問題、政治問題とのかかわりであろうか。国を愛するところを持って、政治問題に積極的にかかわることが薦められている。政治問題にかかわる教会の態度については「カトリック教会の教え」のほうが明確である。信徒に対する指針ではないが、司祭に対する指針で大変具体的なものがあり、思わずにやりとしたことがある。それは葬儀における説教の内容である。興味のある方は項目番号1688を開いて見られるといい。

一人で読み通す自信がなく、皆さんの助けを求めてはじめた「カトリック教会のカテキズムを読む会」だが、人数の変動はあったが、10名を切ることなく続き、当初目的どおり、2010年1月3日、丸4年間で終了した。頑固に「第一日曜、9時のミサ後、12時まで」を貫き通した。休んだのは教会新年会と東ブロックの堅信式とぶつかった日だけ。どちらもミサが10時になり、あとパーティーが続き、開催は不可能だった。こうして無事終了できたことはまず「神に感謝」そして「支えてくださったメンバーの皆さんに感謝」です。ありがとうございました。

(桐原)

「しげちゃんの昇天」

本屋は危ない。わかってはいるがその前を通るとつい入ってしまう。一旦入ると出るときは概ね手ぶらではなくなる。

ふらふらと引き込まれて本棚を見て回っていると、「須賀敦子 遠い朝の本たち」と題した文庫本があった。須賀敦子の名に惹かれて拾い読みをして、面白そうだと買ってしまった。

帰って早速開いてみたら、最初に「しげちゃんの昇天」という一文があった。少し読み進んで、おや、これはあの「おしげ」と昔の丸い笑顔が浮かび上がってきた。

この教会のために随分尽くされた母堂も妹たちも主日にはこの教会でミサに与っておられた。わたしも親しくしていただいた。

「しげちゃん」、わたしの「おしげ」から1949年のクリスマスに貰った御絵は彼女の直筆とともに今も手元に残っている。

(三好)

超教派「鍋の会」(1月31日)

片柳 弘史

1月31日の晩、日本キリスト教団神戸教会で超教派の「鍋の会」があった。昨年12月、「神戸市民クリスマス」の後に聖公会の聖ミカエル教会で行われた超教派青年交流会のときに、神戸教会の矢吹伝道師が「今度はぜひうちの教会で」と呼びかけたが、その呼びかけが実現したのが今回の「鍋の会」だ。日本キリスト教団、バプテスト、聖公会、カトリックの各教会から合わせてなんと40人ほどの青年が集まった。

会は、まず聖ミカエル教会での合同礼拝から始まり、神戸教会に移動して「鍋の会」へと進んでいった。驚いたのは集まった青年たちの若さだ。平均年齢は20代半ばくらいだろう。教職者、聖職者も20代、30代の青年ばかりで、38歳のわたしが参加者の中でおそらく最高齢だったと思う。

このような集まりをするのは、もうこれで5回目くらいだろう。さすがにお互い顔見知りも増え、ずいぶん打ち解けた関係が生まれてきたように思う。同じイエス・キリストを信じ、イエスの十字架と復活に希望を置いて生きている者の中に、本来隔たりがあるはずがない。話しあううちにそれぞれの教派に対して抱いていた誤解も解け、同じ「キリスト教徒」という意識で付き合えるようになってきた。

これだけ異なった教派の若者たちが鍋を囲んで話しあうという試みは、日本中でもあまり例がないのではないのだろうか。二次会の居酒屋での懇親まで含めて、本当に楽しい集まりだった。教職者同士でも話し合ったが、教会の高齢化、維持費の減少、召命の減少、人事の問題など、教会が抱えている問題はどこもだいたい同じで、深く共感し合うことができた。

神戸の中心地、三宮には、日本キリスト教団、聖公会、カトリックの大きな教会が密集している。それぞれの教会に集まって独自の活動をするのもいいが、たまにはみんなで集まって祈り、分かち合いをすることで青年の活動をもっと元気にしていくことができるのではないだろうか。生まれつつある超教派の若者の輪を、これからも大切に育てていきたいと思う。次回は3月、カトリック中央教会で「バーベキューの会」をする予定だ。



~~~~ 教会学校劇団プチトマト公演のお知らせ ~~~~

今年も劇団プチトマト公演を行います。
3年生から5年生の子どもたちが、ほぼ1年かけて練習し、1つの作品に仕上げてきました。そんな子どもたちの姿を見ていただきたく、公演を行います。子どもたちの一生懸命な姿を見てください。宜しくお願いいたします。

日時： 3月14日(日)10:15～ (9時ミサ後)

会場： イグナチオホール

演目： 「なぞの黒い影」2幕

皆様のご来場をお待ちしております。

教会学校 阿部



バタンバン友の会活動報告(2月7日)

2月7日(日)午後2時からイグナチオホールで、ルイス・カンガス神父(バタンバン友の会会長)をお招きし、活動報告会が行われた。

カンガス神父は現在84歳だけれど、歳を感じさせないバイタリティにまず驚かされた。神父は約1時間半余り、主にカンボジアでの支援活動をスライドを交えながら詳しく説明されたが、既にその活動は10年に及ぶ。今回の活動報告は、①国として自立していくには、子供達に教育の場が必要であることから2009年までに13の学校建設支援を行った。②カンボジアは永年ポルポト政権下で苦しめられ、戦争の犠牲ともいふべき地雷が今でも400~600万個も埋められていて、年間800人の人たちが犠牲になっており、現在も撤去作業が続いている。③エイズの犠牲者も多く、エイズ・ホスピスとしてマザー・テレサ修道会のシスター達がエイズ患者のお世話をしている。④貧しい、障害者の成人男女のための職業訓練所「ハトの家」では多くの職種を彼等に教え、自立の助けとなっている。と云った内容だった。

飽食で、平和な日本にいと、身近に感じない飢え、貧困であるが、世界には今も10億3千万人の子供達が飢えで苦しんでいる。「自分には何が出来るのだろうか」と考えさせられる今日の活動報告だった。(蛭田)

活動報告されるカンガス神父



熱心に耳を傾ける参加者



聖体授与の臨時の奉仕者の集い(2月11日)

2月11日、20人程の方が集まり、会が始まりました。お葬式が入り、午前中は「ローマ人への手紙12章3節から8節」を読んでの黙想となりました。そこには、“神が各自に分け与えて下さった信仰の度合いに応じて慎み深く評価すべきです。～奉仕の賜物を受けていれば奉仕に専念しなさい”とあります。それでも始めは、聖体奉仕はなかなかお引き受け出来ませんでした。あるシスターの「聖霊が助けて下さいますよ」の言葉に押されてお引き受けした次第です。今では私にとってこのお役目は大きな賜物であり、恵みであり、感謝です。そしてこれ程緊張感を持ってミサに入り込み集中できることはありません。

午後、松村神父様から「聖体奉仕者としての心構え」について講義を受けました。

教会の歴史を通して具体的に奉仕職について教えて頂きました。「奉仕」とは典礼の中で行われるものだけを指して言うのではなく、むしろ実生活の中で奉仕を生きることが前提にあります。また、奉仕職は特権ではなく共同体のために仕えること。信徒も教会共同体のために仕えること。信徒も教会共同体作りに参加していることを目に見える形で表しているのが信徒の典礼奉仕です。とありました。

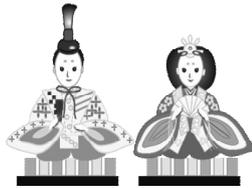
もし、皆様も奉仕職としてのお誘いがあればどうぞ喜んで受けて下さい。大きな賜物であり恵みです。

いつも「こんな私でもよろしいのでしょうか」と主に呼びかけ、聖体奉仕の臨時の奉仕者を勤めさせて頂いております。(福島)

∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞ 各部だより ∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞

📖 青年会

3月14日(日)12:30 定例会
ホワイトデーパーティー
3月28日(日)12:30 定例会
18:00 キリスト教超党派親睦会
(神戸中央教会)



📖 教会学校

3月6日(土)大掃除
13日(土)卒業式&終業式
卒業合宿。
14日(日)子どもと共に捧げるミサ
プチマト公演 10:15~
(於:イグナチオホール)
J.K.クラスお休みです。
※ 3月14日(日)~4月9日(金)春休み

📖 図書紹介

『キリスト教美術の源流を訪ねて』

1 イタリア編 2 地中海編

名取四郎著 平凡社(各1800円)

著者は芸術史を専門とする立教大学文学部教授で、本書は2005年に亡くなるまで、立教学院『チャペル・ニュース』に連載された記事をまとめた、実質上の遺稿集です。古代から中世にかけてのヨーロッパ史とキリスト教に関する豊富な知識や、それに関連する教会を中心とした建築物や工芸、芸術作品に対する著者の愛着と造詣の深さには、驚きと共に深い感銘を覚えます。

本書は主として、学生を引率して行ったイタリア、地中海沿岸地域の研修旅行記であり、質素な宿に泊まり、宿泊前夜に買っておいたパンをかじり、早朝から徒歩で町中の教会や歴史的建造物を見学して回った旅の記録です。そして、ふんだんに添えられた写真はすべて著者自身が撮影したもので、遠い過去や異国に思いを馳せながら、これらの写真を眺めているだけでも時の過ぎるのを忘れます。

もちろん旅程に関する詳細な記述は読み応えがあるのですが、街角の風物、路地裏の光景のひとつひとつ、教会や修道院の内装・外装に関しても、マニアックともいえる緻密さで描写されています。しかし、それがまったくわずらわしくありません。むしろ、紀行・報告でありながら、著者独特の詩的な表現によって、文学作品の趣さえ感じられ、まるで自分がそのグループの一員となって同じ光や風を感じながら、異郷の町を共に歩いているような臨場感に浸ってしまうのです。

第2巻の〈地中海都市編〉では、ギリシャ・小アジアからチュニジアまで足を伸ばし、聖書のパウロの書簡などで私達にもなじみある、ガラテア、コリント、エフェソなど地中海沿岸の地が登場します。ここでもその情景が見事に描かれており、本書のおかげで、名前は聞いていても訪れた事もない異国の地が、急に身近なものになりました。キリスト教文化はもちろんのこと、建築や絵画・工芸、そして海外旅行に興味をお持ちの方にはお勧めです。

(石光)

《 お知らせ 》

★社会活動部より★

- 3月3日(水) 10:00 手芸の集い(第1・2会議室)
どなたでも参加ご自由です。
- 3月13日(土) 10:00 炊き出し(イグナチオお台所)
小野浜グラウンドにて配食や、おじさんたちとお話し相手だけでもOKです。毎月第2土曜日
- 3月18日(木) 14:00 ベタニアの集い(イグナチオホール)
聖体拝領式と茶話会
奇数月第3木曜日
- 3月21日(日) 9時ミサ後 ミニバザー(イグナチオホール)
お弁当、食品、手作り小物等の販売。
第3日曜日9時ミサ後



シナピス神戸“静修会”のお知らせ

「根っこはどこに？」1年間の活動の振り返りと、来年度への展望

日時: 3月20日(土) 11:30

場所: 愛徳カルメル会 本部修道院

指導: 吉岡秀紀師

- | | |
|-------------|-----------------------|
| 11:30 | 受付 |
| 11:45~12:30 | 昼食と分かち合い(お弁当をご持参下さい。) |
| 12:30~13:10 | 講話 |
| 13:10~13:30 | 個人の祈り |
| 13:30~14:30 | 分かち合い |
| 14:30~15:30 | ミサ(各グループの分かち合いの発表を含む) |
| 15:30~16:00 | お茶 |

申し込みは社会活動部 北上まで





釜ヶ崎・子ども夜回り

片柳 弘史

中高生会の子どもたちと一緒に、釜ヶ崎で行われている「子ども夜回り」に参加してきた。「子ども夜回り」というのは、カトリック大阪大司教区が運営している学童保育所「子どもの里」が毎年この時期に行っている、子どもたちを主体とした夜回りだ。六甲教会の中高生会は毎年参加しているが、今年は住吉教会と合同で 17 名の中高生と 4 名のリーダーが参加した。

夜回りが始まる前に、1 時間ほど夜回りについての説明があった。そもそもこの夜回りを始めたきっかけは、1983 年に横浜で発生した中高生によるホームレス襲撃事件だったという。3 名の犠牲者を出したこの陰惨な襲撃事件のことは、わたしもよく覚えている。ちょうど加害者と同じ年齢くらいだったわたしは、事件に対して激しい怒りを感じると同時に、なぜ彼らはこんなことをしたのかと深刻に考えこんだ。

同じ疑問に駆られた「子ども里」のスタッフたちは、これは子どもたちがホームレスの方々を人間として見ていないからだろうと考えた。そこで、子どもたちがホームレスの方々と直接出会い、彼らの人間としてのぬくもりに触れる場を作るためにこの「子ども夜回り」を始めたのだそうだ。

その説明のあと、現在も各地で発生しているホームレス襲撃事件についてのお話が「野宿者連絡会」の方からあった。あまりにもひどい襲撃の実態に、子どもたちは皆ただ唾然としながらその話を聞いていた。「役立たずには生きる価値がない」、「おれたちは街の掃除をただけだ」という襲撃した中高生たちの身勝手な言い分には、みな怒りとやりきれなさを感じたようだった。

話しが終わった後、子どもたちはこの冬一番の冷え込みと言われるくらいの寒さの中、リーダーが引くリアカーの後について夜の釜ヶ崎に出発していった。わたしもその後についていったが、あちこちで暖かい交流が生まれていたようだった。この体験が、「役立たずには生きる価値がない」という完全に間違った考え方を彼らの心から拭い去ってくれることだろう。すべての人には、生きていだけで価値がある。全ての人が大切な「神の子」だというのが、イエスの福音であり、わたしたちの信仰だ。



2009 年度 釜ヶ崎の子ども夜回り一言感想文



★初めはあまり自分から話しかけられなかったけど、最後のほうはちゃんと声をかけることができたのでよかったです。高橋（高1）

★おじさんたちをいさせないように作られたフェンスやプランターを見るたびに、ひどいことだと思いました。おじさんたちを理解することが大切だと感じました。清水（高1）

★どうしておじさんたちは冷たいアスファルトの上で震えなければならないのか。こんな日本の社会を私たちが変えなければならないと思った。逢坂（中3）

★話をしたらおもしろいおじさんもいたからびっくりした。また来たいです。佐藤（中2）

★難波の川沿いを回っていたときにおじさんに声をかけたらとても驚かれておびえた顔をされたのが忘

れられない。毎晩、襲撃の恐怖の中で、またプライバシーのない騒々しい路上で寝るのは疲労がたまって悪循環だと思った。

深山（高1）

★今日初めて知ったことがたくさんありました。でも今日はあまりおじさんと話せなかったのも、もし次参加する時があったら色々喋れたらいいなと思いました。

高橋（中2）

★昨年に比べて、人数が減っていたのが印象的でした。またたくさんの方に話しかけることができよかったです。

中島（中3）



マザー・テレサ生誕 100 年記念写真展のお知らせ

片柳 弘史

1910年にマザー・テレサがバルカン半島で誕生してから、今年でちょうど100年になります。この記念すべき年に、神戸の地でマザー・テレサ写真展を行うことになりましたのでお知らせいたします。

この写真展の発端は、昨年わたしが六甲教会信徒の方々数人と体験学習のためカルカッタに行ったことにあります。カルカッタでの体験を通して、「マザーは人々の心の中に生きている、まだ死んでなどいない」と実感したわたしは、このことを一人でも多くの方に伝えたいという思いに駆られ、写真展の開催を思いつきました。

帰国後、いつも「神戸市民クリスマス」でお世話になっている神戸 YMCA に御相談したところ、快く協力を約束してくださいました。さらに、キリスト教の枠を超えて生田神社の加藤宮司にもお声掛けしたところ、「マザー・テレサのためなら喜んで協力します」とのご返事でした。さらに神戸風月堂の下村会長、関西学院のグルーベール院長、六甲学院の松浦校長なども協力してくださることになり、どんどんマザーが大好きな人たちの輪が広がっていきました。こうして、昨年末40名以上の実行委員からなる「マザー・テレサ写真展実行委員会」が生誕したのです。

この写真展にわたしが望むのは、「マザー・テレサとの出会いを通して、一人でも多くの方に神様の愛に触れてほしい。わたしたち一人ひとりが大切な『神の子』だということを思い出してほしい」ということだけです。わたしたちキリスト教徒にとっては、教会外の方々にイエス・キリストの愛を伝えるまたとない機会になるでしょう。どうぞ皆様、教会外のお友だちとお誘い合わせの上、写真展会場にお越しください。



マザー・テレサ生誕 100 年記念写真展

「マザー・テレサは生きている」

《開催期間》 2010 年 3 月 25 日(木)～4 月 8 日(木)⇒期間中無休です。

《開催時間》 11:00-19:00(最終日は 17:00 閉場)

《会場》 神戸新聞社ギャラリー(JR 神戸駅下車、海側に徒歩 5 分) / 入場無料

《主催》 マザー・テレサ生誕 100 年記念写真展実行委員会

《後援》 兵庫県、神戸市、尼崎市、兵庫県教育委員会、神戸市教育委員会、コープこうべ、兵庫県社会福祉協議会、神戸市社会福祉協議会、神戸新聞社、サン・テレビジョン、NHK 神戸放送局など

《協力》 カトリック大阪大司教区、六甲学院、関西学院、神戸 YMCA、神戸 YWCA、プラス 1 ネット

《問い合わせ先》 実行委員会事務局(神戸 YMCA 内)Tel.078-241-7201 / Fax.078-241-7479

《公式 HP》 http://www.kobeymca.or.jp/mother_teresa/



3 月 の 予 定

		教会暦	教会行事
5	金		初金 7:00 10:00 ミサと十字架の道行き・黙想会
7	日	四旬節第3主日	17:00 海星病院ミサ
12	金		10:00 回心の集会祭儀と十字架の道行き
13	土		14:30 教会学校終業式 (プチトマト公演)
14	日	四旬節第4主日	春の墓参(9時ミサ後) 17:00 海星病院集会祭儀
15	月		14:00 三日月会ミサと例会
18	木		14:00 ベタニアの集い
19	金	聖ヨセフ(祭日)	10:00 回心の集会祭儀と十字架の道行き
21	日	四旬節第5主日	ミニバザー 10:15 小教区評議会 17:00 海星病院集会祭儀
22	月		教区召命の日 教会学校 初聖体・祝福クラス一日錬成会
25	木	神のお告げ(祭日)	マザーテレサ写真展(神戸新聞社ギャラリー 4/8まで)
26	金		10:00 集会祭儀・ゆるしの秘跡と十字架の道行き 中高生会錬成会(29日まで広島にて)
28	日	受難の主日(枝の主日) 世界青年の日	ミサ 7:00 10:00(枝の行列) 17:00 海星病院ミサ
29	月	受難の月曜日	11:00 ベビーとママの集い
30	火	受難の火曜日	
31	水	受難の水曜日	11:00 聖香油ミサ(大阪カテドラル)



広報部員のつびやき

2010年バンクーバー冬季オリンピックが終わろうとしている。うれし涙、悔し涙、満面の笑顔、沈痛な顔、その表情は選手それぞれだが、結果がどうであれ、どの選手も必ず感謝のこたばを口にす。コーチ、仲間、友人、家族、応援・協力してくれたすべての人に。そして、宗教は違えども、直接その名を口にすることはなくとも、最後はきときと神様に。私は何よりもその姿に感動を覚える。嘘・偽りなく、心から神に感謝する人の姿は本当に美しい。

FadA

教会報4月号の発行は、4月4日(日)です。

編集会議は3月28(日)です。

記事原稿は、3月21日(日)正午までに信徒会館
受付へご提出願います。 (広報部)

<http://www.rokko-catholic.jp>

カ ト リ ッ ク 六 甲 教 会

〒657-0061 神戸市灘区赤松町 3-1-21

電 話 0 7 8 - 8 5 1 - 2 8 4 6

発 行 責 任 者 松 村 信 也

編 集 広 報 部